


 書評

アラン・ホブソン 著，村松太郎 訳

ドリームドラッグストア

意識変容の脳科学

渡邊衡一郎

これまで数多の研究者達が精神病の発症メカニズムについて唱えているが、本書の中で筆者は、これについて理解するための最もよいアプローチ方法は、正常人の精神病とも言うべき夢の神経生理学的メカニズムを知ることであると書き、精神病症状や夢、依存性物質による精神症状を中心にさまざまな意識変容について述べている。

Delay, Deniker がクロルプロマジンの抗精神病効果を発表したのが1952年、翌年にREM睡眠が発見され、奇しくもこの時期に非合法な幻覚剤による意識変容がアメリカで流行したという。1950年代前半に注目を集めたこの3要素について、筆者はきわめて明快に、またそれが違和感なくしっくりと理解できるように関係づけて論じている。この分野における第1人者である筆者ならではの造詣の深さを感じられ、評者は読後改めて脳機能に対する関心が深まった。

「ドリームドラッグストア」というタイトルだけ見ていると、いったい何のことかわからないだろう。筆者は「夢は意識の変容であり、幻覚剤を飲んだときに似ている。この点で脳とはドラッグストアなのである。脳は自前の薬を貯蔵しており、それを機に応じて放出したり止めたりする」と説明している。しかし「夢に影響する薬は、それが医薬品であれ非合法の幻覚剤であれ、意識と行動にも影響し、その中には良いものも、(中略)非可逆的なものもあるのかもしれない。心しておこう。薬はキャンディではないのだ」と昨今のこころの病、即薬物投与という薬物治療偏重傾向に対してそれなりに冷静な距離をとっている。

さらに筆者は意識の3次元空間モデル：AIM (Activation, Information, Modulation or Mode) モデルを考案し、この新しくユニークな視点から、メインに取り上げられている3要素だけでなく、精神分析や個人の精神病のなりやすさに至るあらゆる作用・現象や脳機能をこのモデルにあてはめ

て説明している。現在個人の表現型を客観的かつ簡便に評価する方法はあまりみられず、むしろこうしたことは曖昧であるがゆえに救われている部分もあるのだが、筆者は個人個人をこのAIM空間の三次元マップで説明できるとしている。他方、「自分自身の頭に埋め込まれたAIM空間の限界に立ち向かう必要はない。流れに逆らう必要はない。私についていえば、論理的な思考をし、一方向で情動にも十分目を向け、精神療法をしたり、本を書いたり、愛に満ちた人生を送ることができるのだ」と、自身を例に挙げ、解釈次第では悲観的になり得ることに対する救済をしている。

加えて筆者の同僚であるクロード・リファが描いた視覚イメージの変換の絵が随所に示されている。我々が目が覚めたときに、直前まで見ていた夢をわずかに記憶している、あの不思議な思いが再現されており、ぜひとも一読いただきたい。

なお訳者のあとがきも特筆に値する。アメリカ人である著者の持つ西洋の夢の概念とわが国の過去の文芸名作で描かれた夢の概念とを対比させながら、本書の普遍的なテーマについて語っている。

ということで、本書は冒頭のリファの絵のインパクトも加わってか、まさに白昼夢を見ているかのように始まる。その後各種意識変容や薬物療法に関する筆者の考えによって、まるで睡眠のフェーズが進んでいくかのように筆者の世界の中に吸い込まれ、一気に読み進むことができる。最後はリラクゼーションやポジティブシンキングなどが取り上げられ、夢から覚めてほっとするかのように終わる。脳科学・意識・夢などに興味ある一般の読者から専門医、最先端の研究者に至る誰もが唸るような必読の書といえよう。

(慶應義塾大学)

●A5 280頁 2007 定価3,360円(本体3,200円+税) 創造出版